

株式会社 川栄

ネクタイ向けを中心とする織物の製造

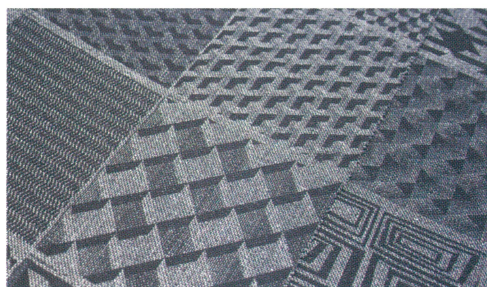
代 表 者 名	代表取締役社長 川村 昌洋			
設立年月日	1978 年 12 月			
所 在 地	〒 403-0023 山梨県南都留郡西桂町倉見 288			
T E L	0555-25-2226	F A X	0555-25-3250	
E - M a i l				
U R L	http://kawaei.neckwear.co.jp/			
業 種	繊維工業	資 本 金 額	1,000 万円	
従 業 員 数	19人			

テーマ

先染織物とプリントによる「ハイブリッドテキスタイル」の開発販売

伝統の郡内織物の技と川栄独自の技術を活かし、織物の重厚感とプリントの多彩な表現力を併せ持つハイクオリティな「ハイブリッドテキスタイル」の開発に成功。高評価を獲得し、新たな市場開拓も進めている。

主にネクタイ向けの織物生地を生産している川栄の製品は、国内外のメーカーから高い評価を得ている。しかしネクタイ生地をメインとする既存の製品だけでは今後、生き残りが難しくなると考え、新たな取り組みとして同社が手掛けている先染織物にプリントを施す「ハイブリッドテキスタイル」の開発を行った。



ハイブリッドテキスタイル

同社の主力商品である先染織物は、重厚感や織物の凹凸感など独特の風合いが特徴だが、デザインや色表現に限界があるというデメリットがあった。一方、後染め生地による捺染プリントは、デザインや色表現は幅広くできるが、白生地であるため独自性に欠け、コストもかかり、凹凸感などがないため高級感に欠けるというデメリットがあった。

そこで同社は、郡内織物産地において蓄積されてきた技術をもとに、デザインから生地製造まで一貫して行える同社の強みを活かして、独特の風合いや重厚感を持つ先染織物に多種多様な表現が可能なプリントを施した付加価値の高い「ハイブリッドテキスタイル」の試作に取り組んだ。

先染織物の良さとプリントの良さを最大限に活かして融合させ、全く新しいテキスタイルを開発

するために、以下の3工程を確立した。

①ハイブリッドテキスタイルのための織物デザインのプリントの図案化。

ハイブリッドテキスタイル付属ソフトを使ってのオペレーション技術やプロファイル作成技術の習得に取り組んだ。またハイブリッドテキスタイル専属デザイナーの育成にも力を入れた。

②ハイブリッドテキスタイルに最適なオリジナルのプリント生地の制作。

既存のプリント工場からプリント用白生地の仕様などの基礎的な知識を学び、オリジナルの最適なプリント用先染生地を作った。次にオリジナルプリント用染色生地に、テキスタイルプリンターを使ってプリントを施し、発色性の確認と改善作業を繰り返し行った。

③染色堅牢試験（色落ち等の物質検査）によるハイブリッドテキスタイルの品質の確認。

染色堅牢度試験を一般社団法人カケンテストセンターにおいて実施し、カケンテストセンターの生地検査基準を目標にした。

これらを達成したことにより、織物でありながらプリント生地の多彩な表現を持たせられる、独自性と新規性に優れた生地「ハイブリッドテキスタイル」を作りだすことに成功した。



テキスタイルプリンター



インタビュー

代表取締役社長

川村 昌洋

● 郡内織物の歴史を守り継ぐ、創業95年の老舗メーカー



長い歴史が積み重ねられている
織物の製造現場

富士山の麓に広がる山梨県の郡内地域は、古くから養蚕の適地で、富士の清らかな湧水にも恵まれていることから、織物が盛んに行われてきた。独特な風合いのある郡内

織物は、江戸時代には「郡内縞」の名で広く知られるようになり、井原西鶴や近松門左衛門の作品にも登場するなど、高級絹織物として高い評価を得てきた。

そんな郡内織物を生み出す伝統技術は、今もこの地域にしっかりと受け継がれている。大正

4年に創業した川栄も、伝統の技術を守り受け継いでいる企業のひとつで、95年の長きにわたり郡内織物を手掛けている。

同社は養蚕業とともに製織業を開始し、洋服の裏地や傘地、マフラーの生地を製造してきた。昭和40年に現在の主力事業となっているネクタイの製造をスタート。以来、大手アパレルブランドや有名セレクトショップに高品質なネクタイを提供している。

「当社が大手アパレルブランドなどに商品を納品できるのは『お客さまに良いものをお届けしたい』という志をもっているからです」と力を込めるのは川村昌洋社長。自信に満ちたその表情からは、伝統の技術を守り継ぐことはもちろん、郡内織物をさらに発展させていくという強い意志を持って事業に挑んでいる姿勢がうかがえる。

● 「お客さまに良いものをお届けしたい」という志。それがすべての事業の基本に

川村社長が訴える「お客さまに良いものをお届けしたいという志」は、同社の取り組みにしっかりと表れている。

高い品質の原材料が安定的に調達できる体制づくり、織物に強みを持つ各地の専門染色工場との工程ごとの事業提携、社内にも紋意匠部門を設けることで可能にしたデザインと製造の一気通貫、自社工場での製織・検反による徹底した品質管理、デザインとファッションを身近なものにするための年2回以上のヨーロッパ研修



海外のデザインサンプル

など、良いものを作りだすためのさまざまな取り組みが行われている。



1200冊以上ある自社製造のサンプル

上に渡り、自社製造のサンプルをすべてストックしている。その数は1,200冊以上。膨大なサンプルが裏付ける豊富な製造実績と経験は、

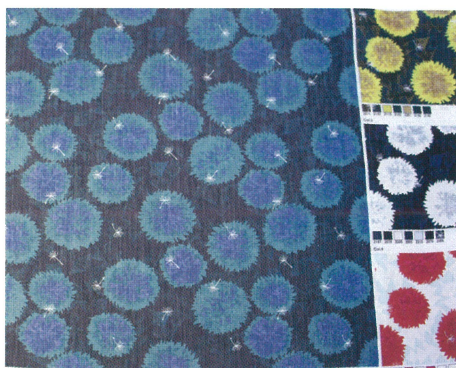
良いものを届けたいという志は、川村達雄会長の時代からも息づいているものだ。同社では100年以上前の海外デザインサンプルを含め、昭和40年代から40年以上

商品開発にフィードバックされ、同社ならではの商品を生み出す土台となっている。

また同社は経営を司る川村社長を筆頭に、二男の川村英之常務が織物で重要な紋意匠部門を担当、さらに三男の川村武史専務が営業を担当している。

「紋意匠図の職人は織物に不可欠な存在であり、その重要な部分を社内で担っているのは当社の強みですね。また留学経験もある専務は、海外進出への足掛かりを作るなど営業の要です」と川村社長。3兄弟それぞれが郡内織物の未来をしっかりと見つめ、同じ「志」を持って事業を進めている。

綿密な計画と準備、そして熱い想いが実現させた、新しいテキスタイルの誕生



ハイブリッドテキスタイル

今回のハイブリッドテキスタイルの開発も、「志」があってこそその取り組みだ。織物を専門とする同社にとって、プリントを手掛けることは、同じ生地を扱うといっても、新しい事業をゼロから立ち上げるほどの大きな挑戦だった。プリントを手掛けるには、プリンターなどの機械の導入だけでなく、さまざまなノウハウが不可欠であり、織における常識とは全く異なる常識が求められるからだ。

「国内でプリントに挑戦した製織業者の8割は失敗しています。それはソフトがないのにハードだけを取り入れたからです。当社では早くから専属デザイナーの育成に取り組み、私たちのやりたいことに共鳴して一緒に取り組んでくれる専門業者の新規開拓にも時間をかけ、しっかりしたものづくりができるチームビル

ディングを大切にしました」と川村社長。その言葉からは開発をスタートさせるまでの綿密な計画と準備の様子とともに、この開発に対する強い想いが伝わってきた。

完成したハイブリッドテキスタイルは、まさに織物の良さである重厚感とプリントの良さである多色多様な表現を融合した付加価値の高いものとなった。「これまでなかった全く新しい生地ができました。本場イタリアの産地のものにも引けをとらないと自負している高い品質の織物に、さらに付加価値をつけられること、それが社内で一貫してできることは大きな強みです」と自信を見せる。



織物の製造現場。奥に見えるのが新たに導入したテキスタイルプリンター

2015年8月から有名ブランドの展示会などで披露し高評価を得ていて、今後のオーダーに期待がかかる。

● 川栄で作ること自体がブランドになる、そんなものづくりをしていきたい

さらに今回の取り組みにより、同社はこれまでの織物に加え、ハイブリッドテキスタイル、そしてプリントもできる企業となった。

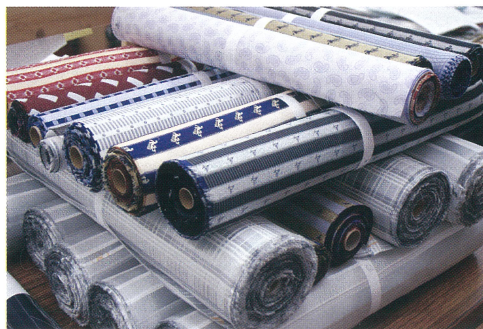
「織物、プリント、新しいハイブリッドテキスタイルがワンストップで製造できるのは、時間的にもコスト的にも大きなメリットです。どの生地にするか選べるのは、国内では当社だけでだと思います」と胸を張る。

また生地業界でも多くの業界と同様にコスト競争が進んでいるが、付加価値の高い商品はコスト競争に巻き込まれる心配もない。「ハイブリッドテキスタイルがあることで、ほかの織物やプリント商品のコストのイニシアティブもとることが可能になってくると思います」と川村社長。ハイブリッドテキスタイルの開発は、新しい生地の開発というだけでなく、さらに大きな効果を生み出しそうだ。

「今回の開発を機に、技術も知識も完成にもさらに磨きをかけて、取引先からますます信頼され、期待される企業になっていきたいですね。川栄にお願いすると確実に良いものだよね、それにワクワクするよね、と言われるような、う

ちで作ることがブランドになるようなものづくりをしていきたいと思います。それと今回、あらためて思いましたね。やっぱり、ものづくりが好きです」

生き生きとした表情で語る川村社長のその言葉からは、ものづくりへの情熱、自社のものづくりへの想いが真っ直ぐに伝わってきた。



川栄が製造している多彩な織物

長い歴史を持つ郡内織物の伝統の技を大切に守り継ぐとともに、新しい技に挑み、伝統の織物の新たな魅力を打ち出した川栄。その姿勢こそが、郡内織物を次代へと、未来へとつないでいく。

沿革

(概略)



- | | |
|-------|---|
| 1915年 | 川村耕作が養蚕業を開始。生地の製織業を開始 |
| 1931年 | 川村栄重が家業を継承し、裏地 / 洋傘地等の生産を開始 |
| 1963年 | 川村達雄（現取締役会長）が家業を継承 |
| 1970年 | ネクタイ生地 / マフラー等生産を開始 |
| 1978年 | 株式会社川栄として法人登記。川村達雄が代表取締役に就任 |
| 1995年 | 川村昌洋が4代目として事業継承し、代表取締役に就任。日本国内のメーカーを通じて、有名アパレルメーカーや大手セレクトショップ等のネクタイを中心に製造 |
| 2000年 | デザイン担当の紋意匠室を立ち上げ、企画 / 生産の一貫と拡充を図る |
| 2009年 | 事業領域を拡大し、海外への事業展開。海外展示会への出展開始。新社屋を完成させて事業開始 |